

社会調査と計量分析を学ぶ

石田 浩

東京大学 特別教授

私は、社会階層・社会移動を専門とする社会学者である。大規模社会調査データを計量的に分析するという研究スタイルをとる。学部・大学院で本格的な社会学のトレーニングを受けたのは、アメリカ合衆国においてであり、その後イギリスでポストドク研究員として過ごした後に、再びアメリカに戻り教鞭をとった。日本に戻ったのは、20年ほどの海外生活を経てからである。このため、私が直接指導を受けたのは英語圏の研究者からであり、影響を受けた著作は英語の文献である。

「私の3冊」の執筆依頼を受けた時、私の研究者人生で個人的に接する機会があり、研究内容だけでなく研究に取り組む姿勢やロールモデルとして大きな影響を受けた3人の社会学者の著書を選んで紹介しようと考えていた。しかし、日本語訳のない著書を3冊紹介するのは日本の読者にはあまりに不親切であると感じた。そこで3冊目は、日本語の著書を紹介することにした。もう1点考慮したこととしては、著書の紹介にあたっては、著書の学術的な意義を社会調査との接点を通じて論じるように心がけてみた。

大規模調査データに基づく 社会移動研究の古典

The American Occupational Structure
Peter M. Blau and Otis Dudley Duncan
Wiley 1967

著者のひとりOtis Dudley Duncanは、私がアリゾナ大学の学部3年生の時に受講した「社会統計学」の授業の担当教員であった。「社会統計学」は必修科目であり、Duncan先生の講義を取ったのはまったくの偶然であった。その当時は、彼がアメリカを代表する社会学者であることはまったく知らなかった。しかし、一分の隙もない体系付けられた講義、明晰な解説、質問に対する真摯な対応などにすっかり魅了されてしまった。大学院のゼミにも参加さ

せていただき、社会調査データの料理の仕方(仕込みから包丁の使い方、味付け、そして盛り付け方まで)を間近で学ぶことができたのは本当に大きな財産であった。私を社会調査における計量分析の世界に導いてくれた恩人である。

この著作は、アメリカ社会学会から優れた研究書に贈られるソローキン賞を受賞していることからわかるように、社会階層・移動研究の金字塔である。この著書で提唱されている社会的地位達成モデルは、その後のアメリカ階層研究を席捲することになる。このモデルは、職業をカテゴリーとして分類するのではなく、社会経済的地位という連続変数として捉える。本書には、分析の基本となる職業の社会経済的地位をどのように作成したのかについての詳細な解説がある。逐次的な重回帰分析(パス解析)の枠組みにより分析することで、世代間移動(父親と息子の職業の関連)と世代内移動(息子の初職から現職への流れ)を統合し、学歴が世代間移動に果たす役割を明らかにした。

Duncan先生がこの著書のもとになる調査データの分析を行った1960年代には、まだコンピュータの使用が普及しておらず、分析モデルを指定して、その計算結果が戻ってくるまでには数か月を要したと耳にした。つまり分析を始める前に、分析の一連の手順と予想される結果について、可能な限り考えを詰めておく作業が不可欠となる。ワンクリックで複雑なモデルを走らせることができる現代においても、この教訓から学ぶべきことは多い。

社会移動の国際比較

The Constant Flux: A Study of Class Mobility in Industrial Societies
Robert Erikson and John H. Goldthorpe
Clarendon Press 1992

著者のひとりであるJohn H. Goldthorpeとは、オックスフォード大学ナッフールド・カレッジにボス



ドク研究員として滞在した際にともに研究する機会に恵まれた。この書に収められている日本に関する章は、その時の共同研究の成果である。

本書は、国際比較研究のお手本と言うべき著作である。各国の大規模社会調査データに基づき、従業上の地位、職業、役職等の質問項目から比較可能な「社会階層カテゴリー (social class)」を構築した上で、世代間社会移動のパターンの国際比較を行っている。基礎になる階層カテゴリーの比較可能性が高い精度で担保されているので、産業諸国間にみられる社会移動の相違は、調査データや階層指標の違いによるのではなく、社会移動のパターンそのものの違いとして解釈することができる。

アメリカの階層研究との違いは、階層カテゴリーという古典的な階層概念を中心に据えて、産業社会間の階層構造の違いを考慮にいれつつ、世代間階層移動の類似性と相違性を明らかにしていることである。日本とイギリスの違いについて1つだけ例を挙げておくと、「農業労働者」の階層カテゴリーをめぐる違いがある。日本ではこのカテゴリーに含まれるのは家族従業者として働く農業労働者がほとんどであったのに対して、イギリスでは大規模農園で働く雇用労働者であった。日本では、家族メンバーによる農業経営を反映して、「農業労働者」の階層継承傾向は、「自営農民」のそれと同程度に高い。イギリスでは、雇用労働者として農場で働いている労働者の階層継承率は低く、非農の雇用労働者との間の階層障壁も低い。このような世代間移動のパターンの違いを明らかにすることができたのも、Goldthorpeとの共同研究の過程で、イギリスと日本の社会調査データを見比べ、階層カテゴリーをデータから丁寧に構成したことによる。

社会調査の実践的アドバイス

『社会調査ハンドブック』

安田三郎 著

有斐閣 1960

日本語で社会調査と関連して役立つ書籍は何かを考えてみた。すぐに思い当たったのは安田三郎の著作である。安田三郎とはまったく面識はないので個人的エピソードはない。安田は、私の専門



分野の『社会移動の研究』(東京大学出版会, 1971年)の著者として知られている。ここでは残念ながらこの本を詳しく紹介する余裕はないが、日本の社会移動研究における最も重要な著作のひとつであることは間違いない。

ここで取り上げる『社会調査ハンドブック』は、初版が1960年、新版が1969年、改訂版が原純輔との共著で1982年に刊行されている。社会調査の初心者のための社会調査方法の解説と用語解説を含むハンドブックとして長く愛されてきた著書である。社会調査の意義にはじまり、調査の手順、職業に関連した調査項目と職業分類の詳細な説明は、上記のイギリスの職業分類との比較に大いに役立った。尺度作成法の解説は、非常にわかりやすく、手計算で応用することができた。圧巻は、質問文例である。「権威主義的価値態度」を測定する質問項目にはじまり、様々なテーマについての質問例が50頁以上にわたり挙げられている。質問文はアイデアの宝庫であるとともに、安田が調査を行った時期の問題意識を如実に物語っており、当時の社会状況を写し出す鏡でもあった。

近年では社会調査データのアーカイブ化が進んで、日本でも質の高い調査データを分析できる機会が格段に増えた。この3冊の著作は、収集された社会調査データに寄り添うことの意義を教えてくれる。質問文をはじめとした調査票設計の大切さ、収集した調査データをコーディングして精度の高い概念を作り上げる手法、分析の一連の過程を事前に見通して予想しておく重要性は、現在の研究にも十分に活かすことができると考えられる。